自身加持
——その語義と諸形態——

生井智紹

序　「加持」という語は絶対的な威神力によって「加持される」(adhiṣṭita) という様に受動態で示されるのが普通である。しかし，〈自身を加持する〉(ātmānam adhiṣṭhānaṃ √kṛ) という表現が密教文献ではよく使用される。この主体的行為としての「加持」はどういう状況を現わそうとしているだろうか。

I．〈加持〉の三相

I．0.　まず，加持の力学的関係を次の様に分類できよう。

I．1．1. 第一には，絶対的な力によって加持されるという一番基本的な用例である。〈加持〉(adhiṣṭhāna) という語は，渡辺照宏氏がすでに検討されたように，Pāli 初期文献以来〈四種の加持〉の例が伝統的に使用されているとされる[1]。特に，その内の satyādhiṣṭhāna は，真理およびその体現者の〈真実語〉のもつ絶対的な威神力を意味する。それは口密の場合に〈真言の加持力〉というあり方で見られるようになる。

I．1．2. satyādhiṣṭhāna の場合，真理／如来の絶対的威神力の側面が強調されるが，如来の威神力を把捉する側の意思の力をも含む例もある。特にこの様な意味での能所相互関係の上になりたつ〈加持〉が『華厳経』などの華厳部全般の特色であることを，渡辺氏は指摘しておられる。本尊と行者との両者の関係の上での加持の状況を，『即身成仏義』では自らの三密の加持の説明の際に用いている[2]。これが，密教的修行法の文脈で主要な用例となる。この場合，〈自らの三密〉を仏との〈平等性〉の境地に〈持〉させる意思という主体的行為が現れ，絶対的威神力を被ると言う段階を一歩進めている。

I．1．3. しかし，密教の修法において用いられる〈加持〉の語は，さらに修行者の能動性を強調する。修行者自身が威神力を行使する主体となって積極的位置に立ち他者に影響を被らせる。自らが自らの三密を加持して仏／菩薩と共通の地平に立つことによって，第三者にその地平からの威神力を被らせるという側面が現

れる。「四無量心観」における，「わが修する三密の加持力をもって普賢［観自在／虚空蔵／虚空庫］菩薩に等同ならしめん」の定形句は，その間の事情を明かす。密教修法で，真言力，絶対的真理の威神力が行者の具体的行為を通じて被加持者／被加持物にその影響力が現れることが〈加持〉のもう一つの特徴となる。

Ⅰ.2.　密教の〈加持〉の特徴は〈自身加持〉という用例に顕著に現わされる。この語の検討を通じて修行者の行為（三密）に現れる〈加持〉の具体の考察が意味を持つことになるかと思う。

Ⅰ.2.1. 〈三密〉が一組となって〈成仏〉を目的とした実践が，『大乗本生心地観経』に見られる。「菩提心品」では，菩提心の空相が論じられた後，菩提心の威力について菩提心陀羅尼の行法が示される[3]。この場合「加持」という語は使用されず〈陀羅尼力〉という観点から総称されている。しかし，行者の発する真言が一切の仏／菩薩の真理によって加持され，心が清浄の月輪として如来の身を念じ出す器となり，如来の身と同化する印を結んでいる状態に，〈三密加持〉による成仏への方向性（菩薩観菩提心成仏三昧）が示されている。ここに〈持〉という側面での陀羅尼の意義が見られる。ただ，密教修法の場合〈加持〉を〈自らの存在〉(ātmabhāva) に具体的に実現するという傾向が強くなる。

Ⅱ.〈三密〉各々の〈加持〉の形態

〈三密〉各々と〈加持〉の語が結び付く例は，初期大乗仏典にも見いだされる。

Ⅱ.1.　まず，〈口密〉については〈四種加持〉のうちの〈真実語による加持〉〈satyādhiṣṭhāna〉の例がある。

Ⅱ.1.1. 渡辺氏の報告するように，『法華経』の「薬王菩薩本事品」では，このような〈真実語による加持〉の典型的な例が見られる。薬王菩薩は，前世において一切衆生喜見菩薩であったとき日月浄明徳如来の舎利を**自らの腕に炎を燈して供養し，現一切色身三昧を得た**とされる。その腕が〈真実語の加持力〉によって，もとどおりになる状況が描かれる[4]。その例では“karomi”と加持の主体が自身であることが示され，“yena satyena satyavacanena”と加持の威神力の根拠が示され，その被る対象が“me kāyo”，“svaṃ mama bāhuṃ”というように自らそして自らの肉体であることが明示される。

Ⅱ.1.2. mantra の〈ことば〉そのものを絶対化する Mīmāṃsā 学派の mantra 観に対して，Dharmakīrti は，実際の所作によって現われる密教儀礼の効果から，mantra も人為的所作であることを証明する[5]。それは，〈ことば〉そのもの

の持つ呪力性というよりは，真理およびその体現者の利他の誓願による〈加持力〉(adhiṣṭhāna) に根拠をおくものである。そこに，初期仏教以来の〈真実（語）波羅蜜〉(satyapāramitā) と〈真言〉との関わりがある。仏教徒にとって，〈呪句〉は真理の認識に裏付けられた限りで〈真言〉たりえるものであり，世間の〈ことば〉そのものが絶対化されるのではない。それが〈真理〉と合致し，〈加持者の本誓〉に合致したとき絶対的ことば（真言）に転じる。

Ⅱ.2.　〈意密〉との関連では，『華厳経』「十地品」や「入法界品」に典型的な例を見いだすことが出来る。

Ⅱ.2.1.「十地品」では，渡辺氏の挙げる用例が多いに参考になる。氏の Dbh No. 1 例では，〈加持〉が菩薩行にとっての根源的な因縁という菩薩の資格であることが，Dbh No. 2 例では，毘盧舎那の本願力と菩薩自身の智恵力の間に加持がはじめて成立つことが示される。この例では，意つまり修行者側の心に仏の威神力が作用する条件として修行者側にそれに応じるだけの理解力と意思が主体的に働く必要性が明かになる。発菩提心をなした修行者の心こそが仏の威神力を顕わし出し，その意思が仏の側の威神力を発揮させ得る起動因となることが示される。いわゆる加する力とそれを被る力との相互関係の上で達成される〈加持〉の働きである。修行者の主体と関連したその典型的な例は，『華厳経』「入法界品」の解脱長者の説法にみられる。その語には，それが〈実践主体〉に密接に関わることが〈sva〉という限定を付して表現されるようになる。この場合，〈加持〉の〈持〉の側面が菩薩の起動因として，そして〈加〉の側面が〈仏身／仏国土の顕現の威神力〉として，〈自心〉という場にこそ発現する唯心のダイナミクスとして神変が捉えられることを示した[6]。

Ⅱ.3.　〈口密〉は絶対的真理そのものとの関わり，〈意密〉は〈菩提心〉という〈被加持者の側の主体的意思〉が〈加持する主体である絶対者〉との関連においてはじめて効果を発するのに対して，〈身密〉は〈自身〉を〈能動的に加持する〉という側面を最も明確に具体的に示す。〈三密〉すべてが能動的に修行者の行為に変ずるあり方を〈自身加持〉(sva/ātma-adhiṣṭhāna) と表現するが，それを自らの肉体的具体性のなかにあらわす〈svakāyādhiṣṭhāna〉の用例が密教に典型的な〈加持〉のあり方を示すと思われる。

Ⅱ.3.1. このような〈自身加持〉(svakāyādhiṣṭhāna) は，菩薩の境地でも八地以上の菩薩の境地での〈加持〉の有り様を示す。前の〈自心加持〉に関する論述の際にも，特に〈身〉の加持もしくは〈加持された身〉という表現の持つ問題点を

指摘した。この威神力を示す状況は〈svakāyādhiṣṭhāna〉に関連する菩薩の〈加持〉の在り方を示す。自ら自身を清浄にして身内に諸仏如来の〈加持〉による姿の現れを説く内容には，渡辺氏のあげる Dbh Nos. 16, 17, 38 などに見られる〈加持〉の用例が背景に伺える[7]。八地以上の菩薩が，あらゆる姿を採って，あらゆる仏国土において，あらゆる道場に，自らの身体（svakāyam）を加持し（adhitiṣṭhati），引発し（abhinirharati），示現する（ādarśayati）状況に，また如来が願身／化身／加持身／色身として現れる際に，この「〈身体〉（kāya）を〈加持〉する」という表現が見られる。その際，**〈自身〉の内に〈仏国土の荘厳／如来身〉が〈加持／現出〉し，〈仏国土の荘厳／如来身〉の内に〈自身〉を〈加持／示現〉する。**『入法界品』の解脱の説法はその場が**〈自心〉という〈表象のみの世界〉**（vijñaptitva）であることを説く。

Ⅱ.3.2. 先述の『法華経』の例は〈身体〉と結びついた加持の典型的な例でもある。薬王菩薩は，前世において十二年の間如来に供養するために自らの身体をそれにふさわしい身体にするために香油を飲んで自ら加持し，灯火となる[8]。この用例では，菩薩が自身を加持する主体として，svakam adhiṣṭhānam akarot という様に，表現されている。この場合，〈加持〉の発動者は菩薩自身であり，加持されるのはその菩薩自らの身体（ātmabhāva）である。

Ⅱ.3.3. これらの例は，行動主体としての〈自らの身体を加持する〉という側面を示すものである。しかも，その主体はいずれも〈清浄身〉を得て〈仏〉の境地に極めて近い段階のものについて表現される。〈加持身〉（adhiṣṭhitakāya）とは，色身，応身として，法身自身が加持されて自らを具体として現す，更にいえば能動態の加持者そのものが身体化することが，この場合の加持の在り方である。先の『法華経』の例で，自らの身体の仏への供養が**現一切色身三昧**を得る前提となったことは，『華厳経』の svakāyādhiṣṭhāna が八地および法雲地の菩薩の身体化の状況を示すのと密接に関連する。

Ⅲ.3.3.1.「如来性起品」では，衆生済度のため**身体をこの世に留める**という誓願をたて自らの身体を真言と薬草とによって加持する医王の例が述べられる。その場合に，真実語の発言のかわりに mantra の誦持が説かれる[9]。**mantra（および医学の知識）による自らの身体の加持**という用例として，注目される。

Ⅲ.〈自身加持〉(svakāyādhiṣṭhāna) と〈三密加持としての自身加持〉

密教修法の〈加持〉の用例は，もちろん〈真言の絶対的威神力〉と〈本尊と共通の地平に立った真如の心の境地そのものの威神力〉との統合的境地の〈絶対的行為〉(三密加持) であるにしても，それを具体的に示す〈身の加持〉が，本尊との地平に立つ具体的行為者の在り様を最もよく示す。その場合，自らは，被加持者である自らの肉体〈自身〉であると同時に如来の地平にある主体（智）として，他者たる一切衆生および象徴としての被加持物を加持する能動的な威神力の担い手となるからである。

Ⅲ.1.　「五相成身観」で〈自身加持〉は，次のような表現でその次第が示される。まず，第一相〈通達菩提心〉，第二相〈修菩提心〉において自らの胸の月輪が清められる。第三相〈成金剛心〉の場合には，自らの胸の清浄化された月輪に金剛の姿が現れ始める。その経緯は〈自心加持〉(svacittādhiṣṭhāna) にみられる〈加持〉の様相である。その〈自心〉のなかにあらわれた金剛（自影像[10]）が如来の身として〈自らの身体〉(ātman) に具現化し（証金剛身），第五相の〈仏身円満〉の際の表現となる[11]。ここに，〈自身〉(ātman/kāya) を〈自ら〉(sva) が現出／加持する（自影像加持）という有様，つまりより高次の主体が絶対者との共通の地平に立って自らの〈身〉に絶対者を具現化するという働きの様がみてとれる。〈自心加持〉の心の水に浮かんだ仏の影像，そのイメージを自身として具現化するダイナミクスが，つまり自らの存在 (ātmabhāva) を絶対的行為者として具現することが〈自身加持〉のあり方といえる。その結果として，即身に仏を実現し，そこに oṃ yathā sarvathāgatās tathâham という自性成就[12]の〈口密〉が自ずから現出するという次第になる。もちろん，そのahaṃ とは，如来の境地に同化した主体である。その状況における修行者のあり方が真如そのものによって保証されているからこそ，その〈口密〉は〈真理および真理のことばによる加持〉を現出する絶対的なことばとなる。

Ⅲ.2.　***Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*** では，“adhiṣṭhāna” と表現されてはいない。が，そこで使用される “bhāvayā” 観想する，現出するという語が，adhiṣṭhāna の状況を示すであろうことは，***Pañcakrama*** の「自加持次第」(svādhiṣṭhāna) の修法からみても，納得しえる。***Pañcakrama*** の第三次第の修行者は，すでに第二次第の心清浄次第を経，秘密灌頂を受けた修行者である。その場にみ

られる〈加持〉の様相である。その〈加持〉は世俗諦（saṃvṛttisatya）との関わりのうちに説かれる[13]。〈幻身〉（māyakāya）という加持のあり方を以て，瑜伽者〈自身〉に能動的主体が具体として現出し，働く状況が〈自加持〉と述べられる[14]。自ら自身が自らの身（ātman/kāya）にあらゆる仏の顕在化している状況を〈自（身）加持〉とする，つまり自身を Vajrasattva として認識し実現することから展開させていくわけである。

結び. 密教の〈自身加持〉が肉体の加持という点に顕著に現れているということができる。つまり，現象のダイナミズムへの〈自身〉の具現化，絶対主体の顕在化である。如来／八地以上の菩薩の〈威神力による仏国土の荘厳および如来／自身の現出〉という意味での〈自身加持〉にそのような原初の形態が伺える。それは，**出現の原理**として絶対的真理の神秘力の顕現である〈加持の諸相〉をそれぞれの局面で示しているといえるかと思う。

---

1) Cf. 渡辺照宏，「adhiṣṭhāna（加持）の文献学的試論」，『成田山仏教研究所紀要』2, 1977, p. 1-91. adhiṣṭhāna を〈加持〉と訳すと密教特有の表現の様に思われがちであるが，初期大乗経典において〈加持〉と漢訳されていなくても原語が同じ状況を同じことばで表現しているのであり，必ずしも後代の〈加持〉という概念で初期大乗仏教の記述を潤色して解釈することにはならないと思われる。

2) 『定本弘法大師全集』，vol. 3, p. 28. 加持者表如来大悲衆生信心。仏日影現衆生心水曰加，行者心水能感仏日名持。

3) 『大正大蔵経』，vol. 3, p. 328bc: 仏言，善男子，凡夫所観菩提心相，猶如清浄円満月輪，於胸臆上明朗而住．若欲速得不退転者，在阿蘭若及空寂室端身正念結前如来金剛縛印，冥目観察臆中明月作是思惟．是満月輪五十由旬無垢明浄内外澄徹最極清涼．月即是心，心即是月．塵翳無染妄想不生，能令衆生身清浄．大菩提心堅固不退．結此手印持念観察大菩提心微妙章句．一切菩薩最初発心清浄真言．菴菩地室多牟致破邪弥．(**oṃ bodhicittam utpādayāmi.**)

4) ***Saddharmapuṇḍarīkasūtram***, ed. P.L. Vaidya, ***BST*** No. 6, Darbhanga 1960, p. 237: tān sarvān buddhān bhagavataḥ sāksiṇaḥ kṛtvā teṣāṃ purataḥ **satyādhiṣṭhānaṃ karomi, karomi, yena satyena satyavacanena svaṃ mama bāhum** tathāgatapūjāparityajya **suvarṇavarṇo me kāyo bhaviṣyati. tena satyavacanena ayaṃ mama bāhur yathāpaurāṇo bhavatu.** Cf. 若原宥昭，真実（satya），『仏教学研究』vol. 50, 1994, pp. 38-72.

5) ***Svavṛtti*** ad ***PV*** I 234, ed. R. Gnoli, ***SOR*** XXIII, Roma 1960, pp. 123f.; 生井，Dharmakīrti: ***Svavṛtti*** ad ***Pramāṇavārttika*** I 308,『密教学研究』25, 1993, pp. 1-27.

6) 生井，svacittādhiṣṭhāna について，『印度学仏教学研究』XLIII-2, 1995.

7) ***Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtram***, ed. by Kondo, 1936, repr. Kyoto

1983, 140, 1ff: sa yādṛśī sattvānām upapattiś ca kāmasamudāgamaś ca tādṛśam eva **svakāyam adhitiṣṭhati** sattvaparipācanāya.…anabhilāpeṣu buddhakṣetreṣu **tathāgataparṣanmaṇḍaleṣu ca pratibhāsaprāpto bhavati.** sa…**teṣu teṣu buddhakṣetreṣu parṣanmaṇḍaleṣu tatra tatra tathā kāyam ādarśayati.** yāvanto 'nabhilāpyeṣu buddhakṣetreṣu sattvānām upapattyānatanādhimuktiprasarās teṣu tathā tathā **svakāyavibhaktim ādarśayati.** sa sattvānāṃ cittāśayābhinirhāram ājñāya yathākālaparipākavinayam atikramād ākāṃkṣaṃ **sattvakāyam svakāyam adhitiṣṭhati**...evaṃ **kṣetrakāyam tathāgatakāyaṃ jñānakāyaṃ dharmakāyam ākāśakāyaṃ sattvakāyam adhitiṣṭhati.** *Ibid.*, p. 193, 3ff.: **cittotpāde** daśadiśaṃ sphāraṇaṃ gacchati. cittakṣaṇe cittakṣaṇe câpramāṇāṃ **abhisambodhir yāvan mahāparinirvāṇe vyuhān adhitiṣṭhati. apramānakāyatām ca tryadhyavagatāyām adhitiṣṭhati. svakāye** câprameyāṇāṃ buddhānāṃ bhagavatām aprameyān **buddhakṣetraguṇavyuhān adhitiṣṭhati.** sarvalokadhātusaṃvartavivartāś ca **svakāye 'dhitiṣṭhati.**…sarvasattvāṃś âkāṃkṣan yathābhiprāyaṃ **rupāśrayālaṃkṛtān adhitiṣṭhati. svakāye ca tathāgatakāyam adhitiṣṭhati. tathāgatakāye ca svakāyam adhitiṣṭhati. tathāgatakāye svabuddhakṣetram adhitiṣṭhati. svabuddhakṣetre ca tathāgatakāyam adhitiṣṭhati.** Cf. 渡辺, *op. cit.*, pp. 524-528, 540-543.

8) *op. cit.* **svakam adhiṣṭhānam akarot. svakam adhiṣṭhānam kṛtvā svaṃ kāyam prajvālayāmāsa tathāgatasya pujākarmaṇe.**

9) Tohoku No. 44, ga 96a: **sṅags daṅ rig sṅgas kyi stobs daṅ byin gyis rlobs kyis kyaṅ bdag gi lus byiṅ gyis brlabs te**, ci nas kyaṅ bdag śi nas lus mi 'ñig pa daṅ, mi skam pa daṅ,…大正, vol. 35, p. 617b: 爾時医王以薬塗身呪術自持, 令我命終之後身不乾燥又不散壊…

10) See 自影像加持 in『無二平等最上瑜伽大経王経』大正 18, 525c etc.

11) ***Sarvatathāgatatattvasaṃgraha***, ed. Horiuchi, pp. 24ff.: atha vajradhātur… evam āha; **paśyāmi** bhagavantas tathāgatāḥ, **sarvatathāgatakāyam ātmānam.** sarvatathāgatāḥ prāhuḥ; tena hi mahāsatva satvavajraṃ sarvākāravaropetaṃ **buddhabimbam ātmānaṃ bhāvayânena prakṛtisiddhena mantreṇa** rucitaḥ parijāpya, oṃ yathā sarvatathāgatās tath**âham**//

12) 〈自性成就〉とは, そのことばが真如そのものに合致した真理のことばであることを示しているのであり, Mīmāṃsaka のようにことばそのものが本性的に真であるということではない。

13) ***Pañcakrama***, ed. Mimaki & Tomabechi, ***Bibliotheca Codicum Asiaticorum*** 8, Tōkyo 1994, p. 32ff.

14) Cf. 酒井真典, チベット密教教理の研究, p. 145ff., 212f.; A. Wayman, ***Yoga of the Guhyasamājatantra***, p. 22, 261, 279, 330, 338.

平成7年度文部省科学研究費補助研究一般(B)(代表松長有慶)による成果の一部。

〈キーワード〉 自身加持, svādhiṣṭhāna, svakāyādhiṣṭhāna, 三密加持, 自加持

(高野山大学教授, 文博)